

■100号記念号によせて

開館から二十三年

高橋 信雄 (学芸部長)

「岩手県立博物館だより」の創刊号は、「博物館建設だより」として昭和54年5月に発刊されています。翌年10月4日の落成記念式典、5日の開館初日の様子は、第7号の開館記念特集号に掲載されています。その中には、まだ暗くて寒い屋外に3時から並んで入館者第1号となった当時黒石野中学校1年生の鈴木聡君の話題等が載っています。

開館から23年の歳月が経過し、開館当初の高揚した雰囲気を経験した現職員も少なくなりましたが、開館当初、正面玄関脇で三方向から支えられていた細く頼りげの無いケヤキの木は、22万人余りの来館者をお迎えし、今は堂々たる樹木に成長しております。

1. 企画展

開館記念特別企画展は、「いわての遺産展」でありました。今年度の企画展は、第52回を数え「南部と伊達」を開催しました。23年間に52回の企画展の他に「中尊寺黄金秘宝展」、「宮沢賢治の世界」等々12回の特別展や多くのテーマ展を開催してきました。

こうした数多くの企画展の中でも10周年記念の「北の鉄文化」、第8回国民文化祭に行なわれた「じょうもん発信」、20周年記念の「北の馬文化」は、特に印象深く感じられます。

これらの企画特別展示は、館の各分野が協力、連携し総力をあげて取り組んだものであります。

岩手県立博物館における共同調査は、昭和58年から4年間行なわれた地域総合調査にはじまります。この成果は、「安代町地域総合調査」にまとめられ、第21回の企画展として公表されました。分野の枠をはずし館の総力を結集し、さらに館と地域との連携を進めるといふ手法は、当時かなり新鮮なものであります。分野の取り組み方に濃淡がみられたものの、こうした取り組みは、その後の館の活動に生かされていると

思います。

2. 北東北三県連携事業

近年、北東北三県（青森県、岩手県、秋田県）は、政治経済、教育文化等の様々な分野で結びつきを強めています。こうした流れの一環として青森県立郷土館、岩手県立博物館、秋田県立博物館では、連携事業を展開することにより、新たな博物館活動の創造と県民サービスの充実を図ろうとしています。平成16年には、共同展を開催する計画が進められています。

岩手県立博物館と他県の博物館の交流・連携は二度目であります。最初は、埼玉県立博物館とでありました。

昭和57年の東北新幹線開通当時の始発・終点駅は、大宮駅と盛岡駅でありました。東北新幹線の開通により、身近になった両県の相互の協力や交流によってさらなる発展を目的としたものであります。そこで文化交流として岩手県立博物館と埼玉県立博物館がそれぞれの特徴ある文化を紹介することになりました。

埼玉県側からは、「北武蔵 杖刀人とその時代」と題し、稲荷山鉄剣をはじめ多くの埼玉県を代表する古墳時代の出土品が、岩手県民に紹介されました。岩手県側からは、「縄文の風景—大地と呪術—」と題し、大型土偶をはじめ岩手県を代表する縄文時代の出土品が埼玉県民に紹介展示されました。

今から20年ほど前の事でありました。昨今の地方分権社会という状況ではありませんでしたが、地方の時代の地方の博物館の新しい試みとして、従来の殻を破る画期的な展示会であったと思います。

3. 遮光器土偶

開館記念特別展の「いわての遺産展」、埼玉県との交流展「縄文の風景」、

第8回国民文化祭に合わせて行なわれた「じょうもん発信」等の大型企画展の主要な資料のひとつに岩手町・豊岡遺跡出土の遮光器土偶があります。当館の開館記念品の元となった土偶でもあります。

この土偶は、所有者であった岩手町の高橋昭治氏のご好意により、平成13年度からほかの多くの資料と共に当館の所蔵となりました。これらの資料は、総合展示室の常設展示に使用されているものもありますが、平成16年1月からはじまるテーマ展「再発見！ 亀ヶ岡文化—豊岡遺跡展—」で紹介することになっています。

開館23年を迎えた当館の収蔵資料数は14万点を超えます。これらの資料を次の時代に伝えていくことも重要な任務であります。その資料をいかに活用していくかということも大切な責務であります。

資料の活用には欠かせないのが調査研究であることは、学芸員誰でもが認識しているはずであります。しかし、多忙な業務の中で、簡単に成果の得られ難い調査研究活動は、どちらかという二の次になることが多いようです。館の特徴を生かした活動を行ない、新たな博物館文化を創造する為の基本として、調査研究活動の重要性を再認識する必要があるのではないのでしょうか。

今博物館は、大きな変革期にあるといわれています。本格的な生涯学習社会の中で、学習意欲が多様化・高度化し社会教育施設としての役割が改めて問われています。当館においても、従来の実績と成果を基盤にしつつ、新しい感覚による自己点検・評価を行ない、岩手県立博物館としての使命を明確にする必要があります。

「岩手県立博物館だより」二百号が発刊される頃は、玄関脇のケヤキの木は、大木になっていることでしょう。太く逞しいケヤキの木に負けずに、博物館が充実・発展して欲しいものです。